

# 重度知的障がい者の就労/職場定着支援

- 企業就労後、継続的に個別の移行支援計画を活用・更新を続けた支援事例 -

○ 大澤 淳一（就労移行支援事業所 トライフル鎌倉）

# はじめに

トライフルは、子どもから大人へ、学生から社会人への移行期を支える支援機関である。

個別の移行支援計画を作成し活用することで、

障がいのある人の意思決定や支援状況は大きく飛躍すると考える。

ここでは、トライフルにおける個別の移行支援計画の活用・更新を通じた、

重度の知的障がいのある方の就労・定着支援の実践報告とその考察を行う。

# 事例報告

## Aさん基礎情報

- 重度知的障がい(愛の手帳A2/区分4)
- ASD
- 優しい性格で、和やかな雰囲気です。空気を明るくするムードメーカー的存在
- 知的障害特別支援学校卒業後、トライフル(就労移行支援事業)を利用開始
- 特別支援学校在学中は、地域活動センター等の福祉就労の現場で実習を体験
- 企業は進路選択になく、実習の候補にも挙がることはなかった

# 事例報告

## ニーズと実態に応じた個別の移行支援計画の策定

- Aさんの希望は「(信頼できる)仲間と一緒に働きたい」ということ
- 「何を」するかよりも「誰と」するか
- アセスメントの実施(就労アセスメント/生活調査アセスメント)
- 個別の移行支援計画を策定し、支援を開始した

# 事例報告

## 就労支援の実際

- 年度当初に進路希望を整理、見学、インターンシップを実施
- 1度目のインターンシップ時の評価はたいへん厳しいものだった
- 事業所内で指摘のあった点の改善を図り、個別の移行支援計画に追記した
- それをもとに2度目のインターンシップを打診したところ、受け入れてもらえた
- その結果、2度目では1回目よりも高い評価を得ることができて、その後の就労につながった

# 事例報告

## 職場適応・定着支援の実際

- 就労後は、職場定着に向けたサポートを実施
- 業務上の技能で補足が必要なところを、休業日に個別指導を行いフォローした
- 相談支援事業所など関係機関と合同で企業訪問を行なった
- トライフルで実施しているコミュニティ活動に参加してもらった
- そこで人間関係を形成したり、ノルディックウォークで身体づくりを行うことを支援した
- 結果、コロナ禍も含めて、現在就労定着3年目を迎えることができた

# 事例報告

## 個別の移行支援計画活用のポイント

- 個別の移行支援計画と併せて、文章や写真なども使った自己PRのためのプレゼンテーション資料を作成し、プレゼンを行なった
- こうした資料を媒介に、具体的な改善の様子を伝えることで、熱意や本気度を伝えることができた
- 「話す」ことが苦手でも、資料を媒介にすることで、自分のことを適切に伝える助けとなった
- そういったことの成果も重なり、2度目のインターンシップを実施する前に、特別に業務の切り出しの機会を得ることができた
- その結果職場適応に向けてより効果的な働きかけを行うことができた

# 事例報告

## 年に1度関係者が一堂に会する意思決定支援会議を開催

- 年に一度、関係者が一堂に会する支援会議を開催した
- 福祉サービスの利用調整のためではなく、あくまで位置付けは意思決定を支援することが目的
- 会議はオンラインで実施
- 個別の移行支援計画を媒介にすることで、印象論ではなく具体的に協議することができた
- 結果本人の特性を活かした新たな業務への挑戦機会を獲得することができた



# 事例報告

## 職場適応/定着支援における個別の移行支援計画活用の効用

- 関係者が一堂に会する機会をつくることで、チーム感が醸成できる
- 個別の移行支援計画を媒介にすることで、印象論ではなく具体的な課題や今後の目標について協議することができる
- 就労前の状況を踏まえて、就労後の状況を検討することで、キャリア形成に向けた可能性を広げることができる

## まとめ

本事例では、重度の知的障がいのあるAさんに対して、個別の移行支援計画を媒介にした就労・職場定着支援を実施した。その結果、以下のような支援の結果が得られた。

- 1.個別の移行支援計画を媒介として、就労後も、職業・生活両面で、必要な支援が継続されたこと
- 2.立場によって異なる情報を、個別の移行支援計画に集約することで、共通した支援が可能となったこと
- 3.オンラインも含め、関係者が一堂に会する機会を設定することで、職業・生活両面を支えるチーム感が醸成されたこと